上町台地界隈の情報紙

揮毫 一心寺 長老 髙口恭行 師

2022年3・4月号
号外 2022 3

発行：NPO法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

二〇二一年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺

新縁起

第33回

聖徳太子 一二〇〇年御忌のこと

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

令和3（2021）年は聖徳太子一四〇〇年の御聖忌にあたり、四天王寺では伽藍の改修など様々な事業が実施されました。ほかにも、10月18日から令和4年4月22日までの約半年間、各宗本山奉修による慶讃法要が営まれています。このように聖徳太子が亡くなって50年、100年ごとの節目には、太子の遺徳を顕彰するための、大規模な法要や事業が行われてきました。

今から200年前の文政2（1819）年にも、四天王寺において「聖徳太子一二〇〇回御忌法要」が厳修されています。

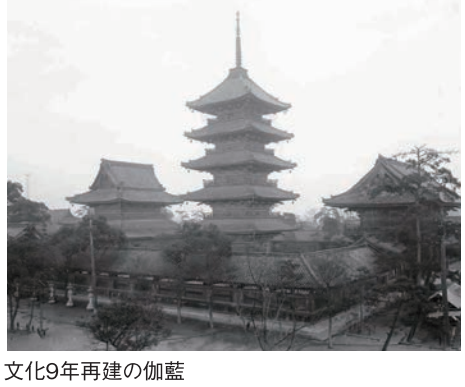
2月12日の法華三昧会を皮切りに、法華八講会・常行三昧会・上宮講式、そして2月22日の聖霊会など3月3日までの22日間にわたり毎日法要が行われました。またこの法要にあわせ、3月4日～4月22日の期間、太子堂・御棚所・六時堂・万燈院・湯屋方丈にて宝物が開帳され、多くの拝観者を集めています。現在の一四〇〇年の御聖忌では、大阪市立美術館・サントリー美術館において大規模な「聖徳太子展」が開催されていますが、美術館ができる以前は、こうして境内の各堂宇にて宝物を展示・公開していたのです。

この宝物開帳とともに、五重塔・仁王門・絵堂が公開され、こちらも多くの参詣者を集めたようです。拝観料や賽銭の記録である『千弐百回御聖忌奉納帖』をみると、五重塔が最も多くの参詣者を集めており、宝物開帳のメイン会場であった六時堂の倍近い拝観料収入となっているのは注目されます。これはおそらく五重塔が展望台として開放されていたことによるものでしょう。いまでこそ通天閣やあべのハルカスが立ち並びますが、当時は四天王寺の五重塔が最も高層の建物でした。大坂の街並みを一望できる五重塔が人気を集めたことは想像に難くありません（下左の絵は『風俗画報』に掲載された五重塔からの様子。右の写真は文化再建の伽藍）。

さらに境内では種々の趣向を凝らした催し物が開かれていました。例えば鳥居の一角では、大和橋一田庄七郎なる籠細工人が大きな仮屋を立てて、九丈六尺（約32メートル）にも及ぶ巨大な釈迦涅槃像を竹籠でつくり、これが大繁盛したといいます。この見世物があまりに客を集めるので、他の店の客足が伸びず、会期の途中で仕舞うところが出たほどでした。また、道頓堀で芝居の公演中であった歌舞伎役者が四天王寺に見物に訪れ、さらにその役者を一目見ようとする群衆によって大きな混乱となり、役者がお叱りを受けたというような記事も残っています。いずれも、境内が大変な賑わいであったことをうかがわせる逸話です。

四天王寺は、享和元（1801）年の火災からの再建にかかった莫大な借金が残っていたこともあり、開帳などによる収益はそれを補填する目的もありました。一二〇〇年御忌は、その点でも大きな成果を結び、疲弊した四天王寺を立て直す重要な契機となったのでした。

荒陵山四天王寺より博覧会を望むの図
（『風俗画報』）



文化9年再建の伽藍

相羽秋夫の

らくごハローワーク

第3職 草木より『植木屋娘』は麗（うるわ）しい

連載3回目ともなると、読者の叱咤激励の声が聞こえてくる。「もひとつやな」「おもろない」に混じって「色気がない」の声があった。そこで、今回は一人娘の婿を捜す父親の涙ぐましいドラマをお届けする。題して上方落語『植木屋娘』の一席である。

◇

一人娘のお光になんとか良い婿（むこ）をと、植木屋の父は日々思い悩む。

字が書けない植木屋は、近所の寺の修行僧・伝吉に伝票の清書などを手伝ってもらっていた。この男に白羽の矢を立て和尚に掛け合うが、「武家の跡とりで、寺で預かっているだけだ」と断られる。そこで一計を案じた。2人だけにすれば、娘と伝吉は理無（わりな）い仲になるだろう、そうすれば伝吉は娘の婿養子になると考え、その機会を与える。計算通り2人は愛し合い、お光は妊娠する。

勝ち誇った植木屋が、和尚に談判する。和尚、「伝吉よ、責任を取って養子に行きなされ」と諭すが、伝吉は首を縦に振らない。「なぜじゃ」と和尚が語気を強めると伝吉「商売が植木屋です。根はこしらえものかと存じます」。

◇

伝吉は、植木屋の策略を見抜いていたのである。伝吉とお光は、歌舞伎『八百屋お七歌祭文』の吉三（きちざ）とお七をなぞらえている。

植木屋という職業は、自らも植木職人だが、若い衆を雇って、果樹・茶・桑・庭木などを植樹したり、剪定（せんてい）したり、樹木の売買をする職業である。

剪定とは、枝の刈り込み（整枝）、新しい梢（こずえ）の先端の摘み取り（摘心）、摘芽、摘葉、断根などをすることだ。また植木屋は樹木の栄養と生殖を保つ。効率の良い受光で枝葉の強化から袋掛け、人工授粉、施肥、薬剤散布、収穫まで担当するなど、その仕事の範囲は広い。現代でも植木職人は重宝がられている。

直線上または円周上に等間隔に植えられた木の本数と間隔と全体の長さのうち、2つを知って残りの1つを求める計算の方法を「植木算（ざん）」と言う。この場合、植木は等間隔に並んでいなければならない。「植木等（ひとし）」と言うからだ。このシャレ、分からないだろうなあ。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

各種予約・お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06・6779・7222

住まいと暮らしの無料相談会

3月12日・4月9日（土）
各10時～12時

大事なことなのだけど、なかなか日常生活では相談できない住まいと暮らしの「困った！」はありませんか？「住まいと暮らしの無料相談会」は弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士などの当法人会員が専門知識を生かしご相談に応じます。電話もしくはHPよりお申し込みください。

主催：NPO法人まち・すまいづくり（市立社会福祉センター指定管理者）
電話：06・6779・7222
場所：大阪市立社会福祉センター（大阪市天王寺区東高津12・10）
後援：天王寺区役所

「うえまち」出版物〝歴博〟で販売中

まち・すまいづくり編集・出版の刊行物（左記）が、大阪歴史博物館ミュージアムショップで好評販売中です。

- 上町台地名所百景
- うえまち 上町台地を想い観る
- うえまち第二集 上町台地と大坂夏の陣
- 夕陽丘まち談義「都市デザイン」の資源発掘
- うえまち「大坂の陣」特選集 大坂の陣そのとき一心寺は

WEB「うえまち」

「うえまち」は本号外のほか、WEBでも情報発信を行っています。

①note（ノート）を使った記事の掲載
本紙連載記事ほか「上町台地名所図会」なども掲載しています。

②フェイスブックを使った情報発信
フェイスブック上で「うえまち編集局」「うえまち台地界隈情報」を運営。

上町台地界隈の情報紙

揮毫
一心寺 長老
髙口恭行 師

2022年3・4月号
号外 2022 4

発行：NPO法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

二〇二二年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺

新縁起

第34回

神仏分離の波

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

春秋二度先祖代々の霊の菩提を弔らふ彼岸、分けて気候の好い春の彼岸其の参詣人の数の多い事といったらあの広い境内が人で埋まる位だ。此の数多の善男善女が前述べた道を行列の様に続いて行くのである、老いも若きも女も子供も互に見失ふまいと手を取り合って行く、婦人連や娘達は此の人込みの中で衣裳比べの心地して、お互に美装をこらし日傘をさして出て行きしものであった。
（日垣明貫「明治初年の四天王寺春の彼岸詣り」『上方』第二七号）

これは画家の日垣明貫の明治初年の回想記です。明治時代に入っても、春秋の彼岸ともなると、四天王寺の境内はかわらず多くの賑わいをみせていたようです。その一方で、明治新政府によって着手された神仏分離政策の波が大阪にも押し寄せていました。

かつて生國魂神社には「生玉十坊」と呼ばれる宮寺がありましたが、明治3（1870）年に、社地内の寺院を取り払って退去するよう命令が下っています。十坊は高野山宝性院の末寺であったことから、本山を通じて仏寺の存続を大阪府に嘆願したものの受け入れられず、同年5月には神祇官より十坊の僧の還俗（僧籍を解いて俗人となること）が通達されました。この通達では、居住を継続するためには仏像・仏具を焼却し、仏堂を取り払うという厳しい条件が突きつけられ、こうして僧たちは退去し、生國魂神社の宮寺はすべて撤去されたのでした。また住吉大社でも神宮寺が廃絶となり、西塔は徳島・切幡寺に売却・移築されています。

このような神仏分離の動きは四天王寺も無縁ではありませんでした。南大門脇にあった十五社は廃堂となり、「和光堂」と称する仏堂に改められています。また四天王寺の鎮守社の役割を果たしていた安居神社などは、四天王寺から完全に分離され、安居神社の別当を担っていた秋野坊（四天王寺の執行職）もこれを辞職しています。

明治4（1871）年には、清僧十二ヶ院のほかは、寺に勤める僧侶がみな俗籍に編入され、寺から離れることとなります。ただし永年にわたって勤仕していた24名については引き続き雇い入れることを大阪府へ願い出ると、法務（法要など仏教行事に関わる業務）には携わらないことを条件に雇用が認められました。

明治8（1875）年、これら下職者19名を寺内で雇い入れる契約を結びますが、明治10（1877）年に洞松実戒が住職となって赴任すると、下職者らが大阪府の通達に反して法務に従事しているとして、雇用契約を無効とし、寺内立ち退きを命じます。下職者らはこれに従わずのちに訴訟にまで発展し、明治13（1880）年には、実戒らが下職者を諸堂から退去させるよう、警察本署へ願い出るなど大きな混乱がありました。

明治という新しい時代に突入した四天王寺でしたが、このように時代のうねりに翻弄される幕開けとなりました。

明治5年の四天王寺

相羽秋夫の

らくごハローワーク

第4職 名奉行『大工調べ』で冴える知恵

奈良・平安期に、神社、寺院、宮殿などの建設を担当した部門を木工寮（もくりょう）と言い、所属の木工を統率する人を大工と称した。この長官名が、今日の大工と呼ばれる職業の発祥である。大工の下で働く木工は、少工（小工）と呼んだ。

江戸期に創られた落語『大工調べ』では、少工も大工と呼び、本来の大工は棟梁（とうりょう）と言っている。演題の〝調べ〟とは、吟味・裁き（裁判）の意味である。

◇

腕は良いが少し頭の弱い大工の与太郎が、仕事場に出て来ないので、心配した棟梁の政五郎が長屋を訪れると、家賃を滞納したため家主（いえぬし）に道具箱を取り上げられたことが分かる。政五郎は、手持ちのお金を出してやるが、家主は「少し足りない」と言って、道具箱を返してくれない。そこで政五郎が家主の所に出かけ、「今日は急なことなので、改めて不足分を持ってくる」と掛け合う。しかし家主は頑（がん）として聞き入れない。怒り心頭に発した政五郎は、事の次第を認（したた）めて奉行所に訴え出る。

お裁きとなり、双方の言い分を聞いた奉行は、政五郎には不足分を全額支払えと命ずる。家主に対しては、「道具箱を預かることは、質屋のする行為だ。その鑑札のないおまえに資格はない」と咎める。さらに、道具箱を与太郎に戻し、取り上げていた期間の大工の手間賃として、与太郎がためていた家賃以上の額の支払いを命じて、一件落着となる。奉行が政五郎に「徒弟を思いやる心に感服した。さすがに大工は棟梁（細工は粒々）」と誉めると、政五郎「へぇ、調べ（仕上げ）を御覧（ごろう）じろ」。

◇

現代では個人業から、大工を在籍させ仕事の受注をする比較的規模の小さい工務店や、大手総合建設業者（ゼネコン）などに変貌した。古代の宮大工組織からゼネコンに成長したのが大阪市天王寺区にある株式会社金剛組である。かつて筆者は、この会社で講演の機会を得たことがある。

ちなみに大合唱で新年を迎えるのは、〝第九〟である。

大人のための文章教室

ライター・編集者 松本正行

言葉を補って正しくニュアンスを伝える

話をよく聞く人をトップに選び、組織は一致団結し業績向上が図れる。

どうにも中途半端な文章です。読点の前と後ろがなんとなくかみ合わないだけでなく、前の文が後ろの文の「手段」なのか、「条件」なのかもよくわかりません。実は、こうしたミスは意外と多くて、書き手が読み手の立場になって読み返していないことによって起こります。手段か条件かは書き手には自明だから、修正の必要性を感じないんですね。

◀

話をよく聞く人をトップに選ぶことで、組織は一致団結し業績向上が図れる。

前の文を後ろ文の手段とするなら右のようになり、条件ならば「話をよく聞く人をトップに選べば、組織は一致団結し業績向上が図れる。」と書かなくてはいけません。また、「選んでいるので」と書けば前の文は理由になります。手段と条件、理由では伝えたいニュアンスが微妙に異なります。自分の思いを正しく伝えるためにも、きちんと言葉を補い、適した表現になるよう心掛けてください。

※本連載は「うえまち号外」掲載分以外も、Webでご覧いただけます（「ノート うえまち」で検索）。

上町台地上にある高津高校出身。新聞社・出版社勤務を経て、現在、Webや雑誌等で活躍中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。